

第 27 回日本生理心理学会大会（2009 年 5 月 17 日，同志社大学）

ミニシンポジウム 2

「中枢系の心理生理学はどこへいくのかー予期と予測の観点からー」

■企画・司会：

入戸野 宏（広島大学大学院総合科学研究科）

■話題提供：

木村 元洋（日本学術振興会・名古屋大学大学院環境学研究科）

小野田 慶一（広島大学大学院医歯薬学総合研究科）

佐藤 徳（富山大学人間発達科学部）

■指定討論：

沖田 庸嵩（愛知淑徳大学コミュニケーション学部）

社会心理学者の Abraham Tesser によると、仮説や理論には S アイデアと B アイデアがあるという。S アイデアは世界に対するほとんど官能的 (sensual) ともいえる新しい見方を提供してくれるが、B アイデアはありふれた退屈 (boring) な見方であり心を動かされない。前者は明快な論理とデータに裏打ちされているが、後者は直感に頼りすぎて理論的深みにかける。

心理生理学の魅力のひとつは“見えないものを見えるように実体化してくれる”という技術にある。心理ー行動ー生理の相関関係を実証し、その背後にある仕組みを明快に説明する理論があれば、それは心理生理学における S アイデアになるだろう。

今回のシンポジウムは、現在もっとも活躍している若手・中堅の研究者に、それぞれの研究関心と将来の展望を語っていただくために企画した。一貫性をもたせるために、3名に共通する“予期と予測”という概念を取り上げた。

木村元洋先生は、視覚刺激の変化に関連した脳電位についての研究で国際的に高い評価を受けている。今回は“感覚・知覚における予期”について、予測できる規則的な感覚事象を視覚システムがいかに効率的に符号化しているかを、事象関連電位のデータに基づいてご紹介いただく。

小野田慶一先生は、ラットの脳波・事象関連電位からスタートし、現在は脳磁図や fMRI を用いて幅広い研究を行っている。今回は“情動事象の予期”について、予期が破綻したモデルとしてのうつ病患者・うつ傾向者の例にも触れつつ、話題提供していただく。

佐藤徳先生は、質問紙研究から事象関連電位までこなすオールラウンドプレイヤーである。今回は“行為における予期”について、行為結果の予測と実際の結果との一致／不一致が“ある行為を自己が行っているという感覚 (sense of agency)”を決めるという研究をご紹介いただく。

指定討論者として沖田庸嵩先生をお迎えする。事象関連電位を中心とした長年の研究経験から、それぞれの話題提供についてコメントをいただくとともに、“言語における予期”などの観点から今回のテーマを補完していただく。

心理生理学の技術を使って何をすればよいのか？ そのような根源的な問いに対して、本シンポジウムが面白い研究アイデアを発見・再発見するきっかけになれば幸いである。